

2025 年度 日本教科内容学会 論文賞

受賞者 梶原郁郎氏

授賞理由

梶原郁郎氏は、これまで教科内容学の本質的課題に鋭く切り込む研究を継続して行っている。本学会誌 11 巻掲載の論文「謎解き読みによる「とんかつ」（三浦哲郎）の作品解釈」をはじめ、研究成果を本学会誌において単著論文 8 編として発表している。まず、本学会設立直後、教科内容学の基底をなす課題、すなわち教科内容学の教育過程論としての構想に関する論考 2 編を発表している。そこでは、研究者自身が学問の内容を学習・研究し、その成果を児童生徒が学習可能となるよう反映させた教科内容を開発する課題が、事例を創出した上で提起されている。ブルナーが提案した教科の構造である法則－事例関係の事例開発を歴史教育において試み、また、デューイが提起した仕事から科学への教育過程を構想する作業を、教科内容学としての教育過程研究の在り方として提示している。さらに、これに関連して教科内容学のもつ社会的意義についても論及している。

この学会初期の論考 2 編以降、自ら教科内容開発の事例創出に取り組み、国語科、社会科、理科を対象に研究を展開している。多くの事例においては授業実践まで行い、その成果を事前事後質問の結果と授業記録に基づいて検証している。このように内容レベルで従来の教科教育研究とは質的に異なる事例研究を提示し、しかも成果の緻密な検証を行って高い完成度を示す論考は、本学会誌においては梶原氏のものを除いてほとんど見られず、その研究の卓越性を示している。ここに氏の研究業績を称え、日本教科内容学会論文賞を贈呈するものである。

<論文リスト>

- ①「教科内容学構築の基礎条件－J.S.ブルナーの『教育の過程』に立ち返る－」『日本教科内容学会誌』第 1 巻、2015 年 3 月、15-28 頁。
- ②「教科内容学としての教育課程研究－J.デューイの教育理論に基づく教育過程の内容構想－」『日本教科内容学会誌』第 2 巻、2016 年 3 月、13-25 頁。
- ③「縄文歴史学を反映させた教科教育内容の構想と実践－歴史学者の思考過程を同内容に保存する－」『日本教科内容学会誌』第 3 巻、2017 年 3 月、21-34 頁。
- ④「理科の教科内容を生活科の授業内容に仕立て直す資質保障の必要条件－大学生の酸性認識の現状を把握する事前質問内容－」『日本教科内容学会誌』第 6 巻、2020 年 3 月、13-28 頁。
- ⑤「謎解き読みによる「鹿」（村野四郎）の教授学習過程－定番化している全体解釈を教育実践から問い直す－」『日本教科内容学会誌』第 7 巻、2021 年 3 月 31 日、3-16 頁。
- ⑥「文学教育「お手紙」における全体解釈「友情」の維持・強化過程－謎解き読みによる全体解釈「手紙」を観点とした授業分析－」『日本教科内容学会誌』第 8 巻、2022 年 3 月、17-28 頁。
- ⑦「江戸期の歴史学を保存する教科内容学の授業内容の構想－燭火を作る仕事から歴史学への思考の展開の保障－」『日本教科内容学会誌』第 9 巻、2023 年 3 月、15-26 頁。
- ⑧「謎解き読みによる「とんかつ」（三浦哲郎）の作品解釈－定番解釈の不整合を解きもうひとつの解釈を提出する－」『日本教科内容学会誌』第 11 巻、2025 年 3 月、27-38 頁。